

福島報

発行 福島地区小学校長会
責任者 会長 逸見 健二
編集 同 広 報 部



【巻 頭 言】

剛毅果断 ～確固たる信念をもち、決断できる校長に～

福島市立飯坂小学校長 逸見 健二

5月に東京都で開催された「全国連合小学校長会第75回総会・研修会」に福島県代議員として参加した。

植村洋司会長より「組織はリーダーの力量以上には伸びない」(元プロ野球監督 故・野村克也氏)の言葉をもとに、「いかなる状況においても校長は学び続けなければならない。自らを高める努力を続けてほしい。」との挨拶があった。また、全連小のスローガンである「校長は自らの使命を強く自覚し、志高く挑戦し続け、子どもたちと学校の未来を見据えたビジョンをもち、確かな判断力と決断力をもって実行し、信頼に応える学校づくりに努める」ようにとの話があった。総会、研修会を通して、今後、取り組むべき課題や諸問題を再認識するとともに校長や校長会のあるべき姿について学び、大いに感銘を受けた。福島地区小学校長会においても、研修会等で学んだことを全会員で共有し、研修を深めていきたいと考えている。

さて、表題の「剛毅果断」は、スローガンの「確かな判断力と決断力をもって実行」に通ずる言葉で、私が校長職を拝命した時から学校経営を推進する上で、また、リーダーの心構えとして大切にしている言葉である。意味は、「意志が強く、強い決断力で物事に取り組むようす。決断力に富んでいるさま。」である。

過去3年間は、どの学校においても新型コロナウイルスの感染拡大に伴う対応等に奔走し、日々の学校経営・教育活動においては、多くの制約と苦難の連続であり、また、正解のない問いに向き合い、知恵を絞り出し、最適解や納得解に辿り着くことが多かったのでは思う。強いリーダーと「ワンマン」「独善的」は紙一重であり、私自身、その最適解や決断に誤りはなかったのか自問自答することもあり、「剛毅果断」とはならない事案も多々あった。特に、近年、いじめ、不登校、問題行動、虐待、ヤングケアラーなど、学校や家庭が抱える複雑化・多様化している様々な課題に対応するためには、「速度」と「精度」、すなわち迅速かつ的確な状況分析・判断が校長には求められている。さらに、昨今、法的な理論武装を伴った保護者の主張が目立ち始め、いじめや生徒指導上に関する保護者の要望・苦情対応には、法的な知識を基盤とした誠実かつ「剛毅果断」な対応が求められている。

そして、校長が「剛毅果断」に至るまでには、教職員同士の従来の「報連相」だけでは足りず、本当にその対応で大丈夫なのか、真の決着・解決につながるのかなど、「確認、再確認、念には念を入れる」ことが重要になってきている。そのため、本校では、「報連相・確確・念念(ほうれんそう・かくかく・ねんねん)」を教職員の合言葉にしている。組織的・機動的な学校経営を推進する上でも大切な言葉で、「報告・連絡・相談・確認・再確認・念には念を」の意味である。この言葉はメジャーリーグでの活躍が目覚ましい大谷翔平選手や菊池雄星選手などを育て上げてきた花巻東高校の佐々木洋監督の言葉で、「指導スタッフの掟」と呼ばれているものである。この合言葉に基づき、選手に関するすべての情報について、指導スタッフ全員で綿密に共有して、的確かつ大切に選手を育成してきたことが、今の翔平選手などの素晴らしい活躍につながっていると推察している。

今後も、教職員同士での「報連相・確確・念念」を徹底し、学校課題等に対しては連携・連動した組織的な対応を進めていくとともに、福島の未来を創る子どもたちの姿を見据え、日々、校長自ら学び続けることにより、組織のリーダーとしての力量を高め、どんな困難な状況においても「剛毅果断」を体現できる校長を目指したい。



お土産

福島市立福島第一小学校長 鳴原 理

6月に入り雨降りの日が増えてきました。雨粒が音を立てながら落ちてくるような朝でも、多くの子どもたちは、濡れて滑りやすくなった路面や行く手を阻む水たまりを気にしながら歩いて登校してきます。私が駐車場から玄関までのわずかな距離でさえ、「濡れそうで嫌だなあ。」と躊躇してしまうような朝でも、子どもたちはズボンの裾を濡らしながら歩いて登校してきます。その姿を見ながら、私は「この子たちは、どうして学校に来るのだろうか？」と少し不思議な気持ちになります。そして、「こんな思いをして登校してくる子どもたちに何かお土産を持たせて帰さなければいけないな。」と、強く思います。私たち教員が、子どもたちに持たせてやれるお土産は、「今日はこんなことが分かったよ。」「こんなことができるようになったよ。」「こんなことがあって楽しかったよ。」という実感なのだと思います。そのためには、「日々の授業の充実」です。どれだけ多くの子どもに「分かった」「できた」という実感を味わわせることができたのか。この一点だけは決してゆるがせにすることなく、子どもたちのため、教職員とともに学校経営に専心努力してまいります。校長会の皆様には、ご指導をよろしくお願いいたします。



汝何の為に其処に在り也

福島市立福島第四小学校長 石幡 良子

「汝何の為に其処に在り也」。7年前、尊敬する上司から言われた言葉です。「教員には、定期的に異動があり、しかも希望人事ではない。『人生の扉を他人が開き』今がある。配置には必ず意味があるからこそ、その意味を考え業務に邁進してほしい。」という内容でした。そう考えると、自分が福島地区に異動したこと、福島第四小学校に配置になったことには大きな意味があり、その意味を考えながら校長として学校経営に当たらなくてはならないと考えています。

福島地区の校長先生方は、校長としての資質能力はもちろん、教育に対する熱い思い、人間性等を兼ね備えている方ばかりです。この出会いにも、意味があると思っています。また、令和6年4月には、福島県初の公立夜間中学校が、福島第四中学校の分校として本校にて開校されます。学びなおし等を目的に、新たな学びを求めて多様な年齢層の方々が入学してくることが想定されます。「学ぶことの意味」について、生きた教材として子どもたちに考えさせていきたいと思っています。定年延長になるとはいえ、校長として勤務ができる時間は限られています。「汝何の為に其処に在り也」。この言葉をこれからも大事にしながら、職務に当たって参ります。



特別支援教育の視点から

福島市立鎌田小学校長 熊谷 賀久

全校生559名で令和5年度がスタートして2ヶ月があつという間に過ぎました。私は久しぶりの小学校勤務で緊張があり、早く子どもたちを知りたいと積極的に教室等に足を運ぶようにしました。子どもたちの元気なあいさつ、頑張っている姿が不安を吹き飛ばしてくれました。

私は鎌田小学校の学区に住んでいて、元PTAです。今回の人事異動に深い縁を感じるとともに、校長として地元の子どもの成長のために力を発揮するという責務の重さを感じます。子どもたちは素直で明るく、意欲的に活動に取り組んでいます。私は特別支援教育に携わってきたので、集中が続かなかつたり、書くことが遅かつたり、トラブルが多かつたりなど、支援を必要としている子どもが気になります。先生方は子どもの課題に応じて丁寧にかかわり、必要に応じてケース会で支援策を検討して共通理解を図って指導・支援しています。

学校が「共に学び、互いに認め、高め合う」学びの場になることが大切です。特別支援教育の視点から、子ども一人一人が持てる力を発揮して生き生きと活動できるよう、教職員が互いに力を合わせ、ユニバーサルデザインを考えた教育活動を展開したいと思います。福島地区校長会の皆様のご指導をよろしくお願いいたします。



“毎日の楽しみ”を原動力として 福島市立瀬上小学校長 高橋 哲也

瀬上小学校に勤務させていただき、早いもので3か月が経とうとしています。この間に、毎日の小さな楽しみを見つけることができました。それは、朝の教室巡りです。

朝の登校指導を終えたある日、ふと、「このまま教室をまわってみようかな…」と思い立ち、何気なく朝の教室をまわってみました。日に日にあいさつが上手になってくる子どもたち、昨日のことや今朝の出来事を楽しそうに話してくれる子、何やら表情が沈んでいる子もみられます。そして、そんな子どもたちを教室であたたかく迎える先生方の姿、朝の教室巡りは、私にとって大切な気づきと見取りの時間になりました。

かわいい559名の子どもたち、そして、日々、子どもたちに寄り添っている先生方、朝の教室をまわりながら「校長として自分がなすべきことは何なのか。」と自問自答する毎日です。

毎朝の楽しみ、そこから得られる“子どもたちの笑顔”と“あたたかい先生方の姿”を原動力として、学校の支えとなる校長になれるよう精進していきたくと思っています。まだまだ未熟者ではございますが、福島地区の一員として精いっぱいがんばります。校長先生方のご指導を、どうぞよろしくお願いいたします。



初心にかえり、「前向きなチーム矢野目小」づくりの推進

福島市立矢野目小学校長 目黒 満

昭和60年の採用から6年の小学校以来、32年ぶりの小学校勤務となりました。再任用の立場ではありますが初心にかえり、子どもたちの笑顔に癒やされ、小学校勤務の新鮮さを毎日味わい、若返った気持ちで4月のスタートを切ることができました。

とは言うものの、子どもたちの姿からは、特別な支援を必要とする児童の増加、家庭や保護者の価値観・子育て観の二極化・多様化の進捗を目の当たりにし、保護者を育てることが喫緊の課題であることを改めて痛感しています。また、対応に当たっている先生方を見ると、ICT教育をはじめ次々と押し寄せてくる〇〇教育の波と教員のなり手不足に起因する欠員等による「業務増大×負担過重の常態化」という相乗作用の中、教職員定数の大幅な拡大による教職員の適正配置と一層の資質向上の必要性を、日々痛感しています。私も教室やプール等で子どもたちと一緒に一教員として笑顔で奮闘しています。

学校経営にあたっては、何より先生方の心身の健康管理に気を配り、授業力・学級経営力・生徒指導力等の資質向上に組織的に取り組みます。より充実した風通しの良い職場の人間関係の中で、日々、笑顔と心の余裕を絶やさない「前向きなチーム矢野目小」として、教育活動の充実を図っていきたくと思います。



笹谷らしく、新しく！

福島市立笹谷小学校長 八巻 博之

校舎を囲む田んぼが鏡のモザイクのように水をたたえ、カエルの大合唱が夏の到来を感じさせます。笹谷地区は古くは農業の盛んな田園地帯でした。今、見渡すと、田んぼの面積もかなり減少していて宅地開発が急速に進んでいます。おおらかな気性と進取の気性とが調和した笹谷小学校の校風は、この地の風土と時代の変遷により育まれてきたものだと感じます。

「笹谷地区は、戻ってきて家を建てる人が多いんだ」と地域の方から伺いました。将来、地元に着実に貢献できる子どもたちは、地域の宝です。コロナの5類移行に伴い、保護者や地域からは学校生活のリ・スタートへの期待も膨らんでいます。単なる再開ではなく、これまでの知見や経験のもとでの地域学習を充実させることで、新たな校風として「笹谷への愛着」をリ・ビルディング（再構築）し、その期待に応えていきたくと思います。

今年度の教育活動も保護者や地域の方々から多くの支援をいただいて順調に動き出しています。さらに、笹谷地区の教育資源を最大限に活用し、地元への愛着を深め、この地で生まれ育ったことを誇りに思える子どもたちの育成に全力で取り組んでまいります。福島地区小学校長会の皆様、ご指導どうぞよろしくお願いいたします。



縁

福島市立荒井小学校長 星 秀文

今年度、福島市立荒井小学校に校長として赴任しました星秀文です。赴任してすぐ、縁を感じる出来事がありました。引き継ぎの際、「アフガニスタン籍の兄弟について配慮が必要。」との話がありました。両親はもちろん兄弟も日本語が十分話せず、連絡は日本語が話せる二十歳過ぎの兄。もうすぐ他県に転校するとの話があるが、それもはっきりせず困っているとのことでした。兄について調べてみると、なんと十数年前、私が二本松で担任をしていたとき、隣のクラスにいた子だったのです。さっそく電話をすると、彼は私を覚えていてくれました。その後、兄への連絡は私が取るようになり、5月中旬に無事新しい学校に転校していきました。当時の学年の先生3人が、彼が日本になじめるために必死に関わった事を鮮明に思い出しました。だからこそ成人した彼は、担任でない私のことも覚えていてくれたのだと思います。教師という仕事は、教えることも含めて人と人との関わりが大切であることを改めて感じ、そして私が荒井小学校に来たのも偶然ではないように思えました。昔の縁を繋げてくれた荒井小学校のため、これから出会う全ての人の関わりを大切にがんばる所存です。今後ともご指導よろしく申し上げます。



学校歳時記と羅針盤

福島市立佐原小学校長 佐藤 栄治

4月半ばから一日に一つの学校ブログをアップしています。児童や環境、授業の様子などの写真を撮って、どんな言葉を添えて発信しようかと思いをめぐらして続けています。ここでは、保護者や地域の皆さんに、校内の様子を紹介するだけでなく、日々の教育活動の中にある価値や意味を感じていただきたいと思っています。ブログのタイトルは美しい日本語を探して、学校の歳時記のようにすると閲覧も増えて、校長の発信が届くのではないかと期待しています。始めてから保護者の感想の声が増えたことが励みです。佐原小の教育を物語り、思いや考えをつなぐハブのような校長でありたいと考えています。

また、前例踏襲にとらわれず継続すべきことや改めるべきことを決めています。責任と背中合わせですが校長の決断でできることは多いと感じています。そのときの自分の羅針盤は「絶対に無くしてはならないもの、あればよいけど無くしてもよいもの、端的に無くしてもよいもの、絶対にあってはいけないもの」という価値の遠近法と、これまで仕えた校長先生方の姿です。いまも迷ったときは、相談すると快く助言をいただける校長先生が、同じ市内ですぐ近くにいただける状況であることに、心から感謝しています。



笑顔のために

福島市立金谷川小学校長 旗野 礼子

アカゲラのドラミングに迎えられた4月から、はや2か月。今は、ホトトギスの声が裏山から響き、雨露に濡れる青葉も目に染みる季節となりました。毎朝の子どもたちとの「おはよう」の挨拶、下校時は全職員で「さようなら」の見送りを続ける本校の今年のスローガンは、「明るいあいさつ 明るい笑顔 最後までチャレンジ」です。「64名一人一人が、心から笑顔になるためにはどうすればよいか」を、教職員はもちろん子どもたちも一緒になって考え、自分ができるところから一歩ずつ踏み出しています。先日、6年の教育相談アンケートを見る機会がありました。そこで特に光っていたのは、「友達にすごいねと言われることはありますか」という項目。ほぼ全員が「ある」と答え、具体的な内容まで細かに記されていました。毎日の教室訪問での光景が目に見えてきました。一人一人が認められ、みんなでチャレンジしようとする姿。担任が自らよいと思うことを実践し、子どもたちも自らよいと思うことを積み重ねていく姿。胸が熱くなりました。保護者、地域の皆様のご支援に感謝しながら、日々成長していく金谷川小の子どもたちと先生方のために、校長として全力で取り組んで参ります。福島地区校長会の皆様、ご指導のほどどうぞよろしくお願い致します。



帰ってきた下川崎

福島市立下川崎小学校長 丹治 達也

私は平成19年から平成24年までの6年間下川崎小学校に勤務していました。11年ぶりに勤務して最初に感じたのは懐かしさでした。子どもたちはもちろん、PTAのみなさんも一人を除いて変わっているのですが、学校全体が以前と変わらない雰囲気なのが不思議でした。

実際に学校がスタートしてみると、PTAの方々の協力体制や地域の方の温かい見守りなどに触れ、地域全体が変わっていないことが懐かしさを感じる理由の一つだと感じました。校舎内のあちこちに自分が残していったものがそのまま残っていたり、よりよく改善されていたりするのを見つけるたびにうれしくなっています。

来年度には教え子の子どもが入学する予定だという話を聞きました。まるで故郷に帰ってきた気分になっています。その下川崎小学校も義務教育学校になるまで残り2年です。有終の美を飾れるよう全力で学校経営に取り組みたいと思います。

福島地区小学校長会の皆様には、今後もたくさんのご教示をいただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。



私たちの合い言葉 鳥川小プライド

福島市立鳥川小学校長 穂山 俊之

私たちの合い言葉
わたしの右手には 家族がいる
左手には 仲間がいる
両肩には 教え子がいる

左の言葉は、以前に勤めていた学校の職員玄関に掲示されていたものです。とても気に入って、学校が変わるたび、先生方に紹介しています。

4月当初の職員会議で私は、「教職員の和と保護者・地域の学校への信頼を基盤として、教育目標の達成に努める学校を目指したい。」と、先生方に話しました。そして、そのカギとなるのは「同僚性」であり、「協力的な保護者・地域に対する感謝」であり、「伝統ある鳥川小に勤めているという誇り(プライド)」であるということも。校長室には、歴代校長の写真が36枚飾られています。その写真を眺めるたびに「歴代の校長先生方も『今、何ができるか、何をすべきか・・・。』と考えておられたのだろうか。」と、今の自分と重ね合わせて想像し、伝統と責任の重さを感じています。「子ども達も、先生方も、学校へ行くのが楽しみと思える学校にしたい。」まだまだ“思い”ばかりが先行して、そのための具体的な戦略がないのを反省しつつ、理想の学校に少しでも近づけるよう、日々努力しているところです。地区の校長先生方には、引き続き、たくさんのご教示をいただきたいと願っております。どうぞ、よろしく願いいたします。



地域とともに邁進

福島市立平石小学校長 菅野 泰英

小学校での勤務は初めてである。34年間、中学校だけ勤務してきた。右も左もわからない中、早2ヶ月が経っている。毎日が勉強で、職員たちからご教授いただいている。前任校も小規模中学校で、地域の方々に支えられて様々な教育活動が展開されていた。本校も全校生27名で完全複式学級の小規模校である。赴任して教育計画を見ると、地域の方々に学校へお越しいただき協同での授業や行事など多いことが窺える。田んぼの先生、果樹の先生、野菜作りの先生…地域の方々とお話しすると、皆口をそろえて「学校のため、子供たちのためだから遠慮すっことねえぞ。校長先生」と話され、温かいお言葉を頂戴している。そのような学校だからこそ、小規模校の「強み」を最大限に生かし、特色ある教育活動を校長として推進することが、私の使命であると感じている。ひとり一人の学習達成度を把握し個に応じた最適な学びの提供、ICTを活用し外部とのオンライン等でコミュニケーションスキルを磨く機会の設定、異年齢集団を日々の生活の中で活用する等々、やることが満載である。これからも教職員と保護者、地域の方々との協同で「地域とともにある平石小学校」の発展を目指し、校長職として邁進していきたい。



「庭坂プライドを持って」という話 福島市立庭坂小学校長 長澤 昭仁

本校児童との初対面の始業式では「庭坂プライドを持って」という話をしました。「みんなは庭坂小の児童として、何か誇れるものはありますか。各学年で行っている『ふるさと学習』などを通して、庭坂小の児童であることに誇りを持ってほしい。誇りを持つ人間は、ふるさとや庭坂小、そこで生活している友達や自分を大切にすることができるからです。『こんなことをしたら庭坂小の一人として恥ずかしい』などと考えて自分を大切に、正しく判断して行動することができるのです。」といった内容です。そして、徒競走、紅白リレーと運動会練習もたけなわの5月の昼の放送で「庭坂小の校庭は福島市の学校で何番目に広いでしょうか」というクイズが出題されました。30秒後・・・「正解は、ウの一番広いです」と声高らかに正解が告げられました。「どこの情報だ？」と職員室はザワつきました。放送委員に聞きに行くと「前に先輩がそう言っているのを聞きました!」・・・それが根拠でした・・・

子供たちは校長などに言われなくても、先輩から、ちゃんと自分たちの学校の“誇り”を引き継いでいるのです。(違うことはわかっていますが、どうぞ、そっとしておいてやってください・・・お願いします)

校長の資質能力向上のために

福島市立杉妻小学校長 小松 浩行

今年度の福島支会研究部の活動の柱は、なんといっても福島県小学校長会研究協議会会津大会で3つの方部が発表することです。令和4・5年度の「研究の手引き」を基に、情報を共有しながらこれまで各方部で研究・実践を積み重ねてきました。その成果と今後の課題を明確にし、私たち校長としての在り方を明確にしていかなくはなりません。会津大会では、他の支会の校長先生から意見や提案をいただき、今後の学校経営を充実させていくことにつながればと思っています。

さて、福島支会の研究部は5方部に分かれて活動しています。学校数の減少(校長数の減少)、本支会から県研究部の幹事が多く選任されていること等の理由から、方部によっては研究部と他の部を兼任する事態も出てきています。このような問題が出てきていますが、福島支会の研究は「一枚岩」にならなければと思います。問題の解決方法を探り、今後の研究が充実するようベクトルを同じくして進んでいきたいと思っています。

先も見通さなくてはなりません。来年度の東北大会で信陵・飯坂方部が発表となっています。また、令和9年度には全連小(兼:東北連小・県大会)福島大会が予定されています。これらに向けての研究・協議も計画的に進め、校長の在り方を探っていく必要があります。その際に大事にしたいのが福島県小学校長会で発行している「研究の手引き」です。この手引きは、研究の視点が明確になっており、また、校長の役割と指導性(指導力)や校長の働きかけが明示されています。手引きの作成に当たっては県小学校長会研究部の幹事の皆さんが2年間をかけて検討を繰り返し、協議しています。私は、大変価値のあるものだと思っています。それがすべてではありませんが、これを有効活用することは、各方部の研究の深まりにつながると信じています。

3方部が会津大会で発表、うち信陵・飯坂方部は来年度の東北大会で発表となり、諸準備でご苦勞をおかけしますが、研究の成果を我々校長の資質能力の向上につなげていきたいと思っています。

編集後記

今回の広報誌を編集するにあたり、たくさんの先生方からの寄稿に感謝しながら原稿を拝読させていただきました。それぞれの先生方の熱い思いに触れ、この広報誌が福島市全体の教育により影響を与えるものと強く感じました。原稿を寄せてくださった先生方に感謝申し上げます。

福島市立下川崎小学校長 丹治 達也